

## 喉頭摘出術－患者の立場から－

佐々木 喜八郎

**要旨** この度、国立医療学会誌「医療」への寄稿を患者の立場としてお願いしたいとの依頼がありましたこと、私ども心からうれしく思っております。しかしながら、現在ではインフォームド・コンセントが浸透しており、安心して治療に励まれる方が多くなっております。改めて医療サイドへ望む改善すべき点などを述べることはとくにありませんが、手術後の「再発への不安」に対するカウンセリングを充実していただきたいことです。これからは、私が体験した事柄について述べてみたいと思いますので、喉頭摘出者についてご理解をいただければ幸いです。

(キーワード：喉頭摘出術，患者，家族，代用音声，食道発声)

Total Laryngectomy Problems and Solutions : From the Patient

Kihachiro Sasaki

### はじめに

私たちの会は、主に日立総合病院において喉頭摘出手術を受けて声を失った方々に、代用音声として食道発声法の指導を行っております。指導員はもちろん、会員の皆さん全員が喉頭癌や咽喉癌などを患い、救命治療として喉頭全摘出手術を受け、音声言語機能を喪失してしまった方々です。

また、病院側からの依頼で手術前の患者に対する相談も行っており、主に術後の障害の内容等についての説明をしております。

◆障害の内容については、

- ◇音声機能の喪失……話すこと・笑うことができない。
- ◇気管孔での呼吸……入浴の方法、吹く・鼻をかむことができない、猫舌。
- ◇臭覚・味覚障害……匂いがわからないこと、わさびが数倍効く。
- ◇気管孔の保護策……プロテクターの常用（乾燥防止、埃の吸引防止、等）。

会員相互の協力とボランティア精神に基づいて、会員各自のリハビリの実を上げるとともに、社会復帰という希望と夢の実現のため、同病者に対し第二の声を習得し

ていただくよう訓練・指導に励んでおります。

喉頭摘出後の発声法、すなわち代用音声にはどのようなものがあるかと申しますと、器械を用いて音を出してしゃべる人工喉頭や電気式発声器（エレクトロ・ラリンクス）と、自力で発声する食道発声法との2つがあります。この自力で発声する食道発声は、空気を食道へ吞み込んで、その空気を腹圧で押し出す時に、喉の出口を締めて押し出すと、その部分が振動して音を出す方法です。皆様がサイダーやビールを多く飲むと、気泡が胃の中にたまって、この気泡が逆流して喉から出る時にゲップとなり、その時、喉のあたりでグ・グ・ゲーという音が出ることを経験したことがあるかと思います。この音を作るためにお茶や水と一緒に空気を食道に吞み込んで、その空気を腹圧によって押し出す時に喉の部分を圧縮して出せば、喉の部分が振動して音が出るわけです。この音を原音として、唇や舌などで形を作ることによってことばにするのです。この方法が食道発声の原理となっております。

### 「休職伺い」を提出

さて、私ごとにわたり恐縮ですが、昭和63年4月4日は私が喉頭癌に冒されていると診断され、私の人生を大

日立喉友会

別刷請求先：佐々木喜八郎 日立喉友会

〒316-0024 茨城県日立市水木町1-22-2

(平成17年12月22日受付)

(平成18年1月20日受理)

きく変えた日でもあります。数年前から声がしゃが嘎れてきておりましたが、学生時代に合唱団に所属しておりましたので、声の出し過ぎでポリープができたのだらうくらいに考えておったのです。まして、喉頭痛などという病名すら、知りませんでした。しかしながら、日がたつにつれだんだん息切れがしたり、呼吸が苦しくなってきましたので、立ち寄り日立多賀病院の耳鼻咽喉科を訪れたのです。間もなく診察室に呼ばれて、診察台に座ると鼻から麻酔をされて内視鏡を入れられました。ほんの4-5分で診察を終え、『これは間違いなく喉頭痛ですね、早いうちに手術をしなければなりません。すぐ日立総合病院に行ってください』と医師に告げられた時は、目の前が真っ暗になりました。『なぜ、オレがガンに冒されねばならないんだ。誰にも迷惑ひとつかけたこともないのに……』と、失意のどん底に落ち込んでしまった訳です。『オレはガンで死ぬんじゃないだらうか……』という恐怖感も襲ってきたものです。種々の検査を繰り返した結果、患部にできた腫瘍は悪性とのことで、私のがんの進行状況は四段階中の四期とのこと。手術以外では治す方法がないという、最悪のケースとなっておりました。もしかしたら放射線療法で治るのではと医師にお願いをして、約20回の放射線治療を受けましたが、腫瘍を取り除くことができず途中で打ち切りました。『声帯を失ってしまったら、営業の仕事が続けられるだらうか……』『手話や筆談のやりとりで、顧客と商談ができるのだらうか……』、『20数年間、営業一筋できたのだから、声が出なければ会社を辞めなければならぬのだらうか……』、『収入がなくなれば、子供たちの学業を続けさせられるのだらうか……』、などなど。いろいろなことが私の頭の中を堂々めぐりをし、複雑な心境に陥ったものです。

『目は見えるし、手足も大丈夫、耳も聞こえるのだから、声ぐらい失っても大丈夫だらう……。妻や2人の子供のためにも長生きしなければ……。そういう気持ちに落ちついたのは、約2ヵ月後のことでした。担当医から『もし、このままでおれば、あなたの寿命は数ヵ月しか持ちませんよ。手術をして腫瘍を取りのぞけば、あなたの命は最低4年間は保証しますよ……』と諭され、この言葉を信じて、翌日、私は会社に休職伺いを提出し、手術を受ける決心をいたしました。

### 手術、そしてリハビリ

6月21日に入院、3日目の朝8時には手術室に入り、数時間にわたり喉頭全摘出手術が行われました。手術は順調に行われ、病室に戻ったのは意識を取り戻してきた

夕方6時でした。麻酔も切れ始めてきたところで、痛みもひどく感じられ、初めて声が出ないことの辛さを感じたのはこの時でした。首にはガーゼが巻かれ、その上にガムテープを巻かれており、苦しいやら痛いやらで大変でした。『痛い、モルヒネを注射してください』といたいのですが、声が出ない。言葉を失うということでの精神的ショックは、想像以上のものでした。55日間の入院生活も無事終え退院いたしました。数ヵ月間はどん底の毎日でした。手術前の『まあ、なんとかなるさ』そう思って手術を受けたものの、いざ声が出ないとすると、何をすることも筆談に頼る日常生活は、ストレスがたまり苦しいものでした。以前は外交的だった私の性格も、手術後は内向的になってきており、一時は家に閉じこもりつきりになりがちでした。入院中は、とにかく病人としての生活でよかったのですが、退院して直接世間に接してみると、当然のことではあります。今さらながら自分の意志が相手に通じないことのもどかしさ、それがいかに惨めであるか、事につけ、折にふれて痛切に感じられました。また、不具者としての自分をイヤというほどみせつけられ、何かやりきれない焦燥感におそわれ、追われるような悲しい気持ちに駆られたものでした。喉頭全摘出手術を受け声帯を完全に失うと、どのような思いで過ごされているのだらうか？ 同病者にしかその悲しく辛い気持ちはわからないのではないのでしょうか。

その当時、ある同病者が詠われた『わが目見え、わが耳きこえ、わが咽喉に、声ある幸を、常はおもわず』という句を拝読し、自分自身が情けなくなり思わず涙したものです。

10月に入ったある日、甥の来訪を受け、偶然にも彼の知人に声の出る同病者がおるとのこと、早速その方が入会されておる「銀鈴会」を紹介していただくようお願いすることにしました。退院後は、首のところに大きく開いた気管口の穴を見つめては、声も出ない自分のみじめな姿に情けなくなり、一時はすっかり落ち込んでいたころでした。でも現在は、こうして生きている。誰にも迷惑をかけない生き方をしなければ、幸いにも目も耳も足も健在なので、いたずらに失ったものを嘆くより、残っているものをできる限り活かして上手に生きてみよう。

数日後、会長が会っていただけるとの連絡が入り、11月4日に甥の案内で家内をともなって発声教室が開かれている東京都障害者福祉会館を訪れました。知人の神代健夫氏に連れられ、中村会長がおられる応接室に案内されました。最初は期待と不安のまじりあった気持ちで会長のお話を聞いておりましたが、健常者と変わらぬしっかりした言葉で話されておる様子を見てうちに、何

か自信がもてたような気持ちになりました。

失意のどん底に落ち込んでいた自分が、この中村会長さんの『必ず声は出ますよ、がんばりましょう』という励ましの言葉を信じ、週に3日で約6ヵ月間にわたり「銀鈴会」の発声教室へ通い、第二の声である食道発声法をどうにか習得することができました。翌年の7月には会社の温かい取り計らいで、職場を営業から内勤の仕事に変えていただき、無事職場復帰をすることができました。

#### 日立喉友会の発足

ところで、日立喉友会の発足につながるきっかけとなりましたのは、平成3年の4月に当時の主治医から喉頭全摘出手術を受ける方に会って、自分の体験した術後のリハビリや食道発声について、お話をしてもらいたいとの相談をうけたことから始まります。当時は家族の方々や本人に病室で面談した上で、術前の心構えや術後のリハビリについて、自分が体験したことがらを話して激励をしておりました。その後、退院された方々を「銀鈴会」の発声教室へ案内してほしいとの依頼があり、会社

の休日を利用して1年半の間に、7名の方々を私が通った「銀鈴会」の発声教室（東京都港区）へ同行し紹介することにしました。

しかしながら、比較的高齢な方が多く東京までの通学が体力的に無理ということになり、大半の方が断念しました。結果的に、これが当会の発声教室開設のきっかけとなった訳です。これには日立総合病院の院長さんや事務部の方々の多大なご支援のもと、耳鼻咽喉科の先生方のご協力をいただき、平成4年12月に会員5名で日立喉友会をスタートさせることになりました。1年後には日立市社会福祉協議会のお世話で、日立市ボランティアグループ連絡会に加盟することにもなりました。今までに日立市・ひたちなか市・北茨城市・高萩市・常陸太田市、東海村より54名の方が入会してきましたが、現在は24名の会員が代用音声を習熟すべく、食道発声の訓練に励んでおります。

今後も同病者に対し食道発声法の指導を通じて、術後のお役に立つことを念じて活動を続けていきたいと思っております。